情緒の発達課題と早期療育

つくも幼児教室
阿部秀雄　安藤則夫
石田遊子　鈴木佐江子

情緒は，受容系や表出系に対して，知能とともにいわば調整系を構成する１つの独自の系であり，乳幼児の人格発達において主導的な役割を果たしている。したがって発達障害児の早期療育上重要な意義を持っているにもかかわらず，これまで理論的な追求が十分に行われてきたとはいいがたく，情緒発達を促進するための系統的な働きかけに欠けていたように思われる。そこで私たちは，情緒の発達評価の手続きを確立し，発達障害児，とりわけ情緒発達の遅れを顕著に示す児童（いわゆる自閉児）に対する早期療育プログラムを定式化することを研究目的とした。本年度は，情緒の発達段階を明らかにして，個々の段階における重要な発達課題を探ることを中心的な課題とし，合わせて，情緒発達を促進するための療育プログラムを模索することを副次的な課題とした。

研究方法としては，(1)文献研究，(2)乳児院における行動観察，(3)情緒発達の顕著な遅れを伴う幼児の発達過程の分析，(4)障害幼児に対する情緒発達促進の試行，という４つの方法を併用した。

情緒の発達段階についてはいくつかの研究者から提出されているが，それぞれに長短があり，特定の説をそのまま採用できない。

そもそも療育という観点からすれば，情緒の発達評価に際しては，発達の程度，水準をとらえるのでなく，重要不可欠な発達課題が達成されているかどうかを明らかにすることが大切であり，そうした発達課題に基いて発達段階が設定されなければならない。

また，実際の評価にあたっては，ある指標がたんに達成されているか否かを問うのみでは，問題の所在が浮きぼりにされないことが多い。それが低次の（すなわちより基礎的な）発達段階に属するものであれば，ある発達課題が全然達成されていない場合はまれであり，さりとて申し分なく完全に達成されているというのも少なく，不十分にしか達成されていないか，あるいは逆に過度に強く見られる，というのが通例だからである。

それに関連して，発達のずれ現象がしばしば出現することも指摘しておこう。より低次の段階の発達課題が多少とも達成される場合がめずらしくないのである。したがって，ある段階の発達課題がおおむね達成されているからといって，それより低次の課題はすべて達成されているものと仮定することを許されない。最も低次の段階から１つ１つ検討を進めていくことが大切である。

乳幼児期における発達段階と，それぞれの段階における発達課題についての試案を次に示す。また，発達促進プログラムについては次年度の中心的な課題とするため，試行の結果についての報告も省略する。

1. 自足期（０カ月）── 不快を表出し，解消されてしずまる。

栄養欲求や安全欲求や愛撫欲求といった基本的欲求の不充足状態を不快として表出し，養育者の手で欲求が充足され不快が解消されてしずまる。不快を表出し解消されるという経験の積み重ねを通じて，子どもの基本的な

存在感（あるいはM．Lamb のいう「自己有能感」）がはぐくまれていることが重要なのであって，必ずしも欲求充足が快の表出を伴わなくてもよい。したがってこの段階では，いかに強く不快を表出できるか，また不快が解消されてしずまることができるかが重要なポイントである。

2. 微笑期（1～2カ月）――人をじっと見つめ，快適な働きかけを受けてほほえむ。

抱き上げ，揺さぶり，なでさするといった快適な愛撫刺激を受けて不快－解消の経験を重ねながら，同時に，見つめ，ほほえみかけ，語りかけるというあやしを受けることによって人への定位行動が引き出されており，快適な働きかけをしているときはもちろん，格別の働きかけをしていないときでも人をじっと見つめる。また快適な働きかけを受けると，その刺激受容による快が人に対して表出される。つまりこの段階の重要なポイントは，人への定位行動がみられるかどうかということと，どの程度快を表出するかということである。

3. 期待期（3～4カ月）――人の働きかけを期待して喜び，その人をうれしそうに見ながら働きかけを求める。

人の快適な働きかけによる満足経験が積み重ねられた結果，そうした働きかけに対する期待が生じている。したがって人があやしかけると，またときにはあやしかけない場合であっても，快適な働きかけを期待して人を見つめ，笑い，喜びの声を上げ，手足をばたつかせるといった，いわゆる「おはしゃぎ反応」を活発に示す。これは人に対する道具的な期待反応であるという性格が強く，期待がかなえられた後では人に対する反応が弱まる。逆に期待がかなえられなかった場合は，泣き叫ぶなどの「抗議」反応を示す。また道具的な期待反応であるために特定の人に限って出現することなく，程度の差はあれ，期待する反応が得られそうなすべての人に対して無差別に出現する。そしてこの期待反応は後に，さらに積極的な要求行動へと発展する。この段階では，期待が生じていることと，期待が活発に表出できるということの2点が，重要なポイントである。

4. 愛着期（6～7カ月）――母親といっしょにいたがり，触れ合って落ち着く。

これまでのように人からの刺激ではなく，人そのものが認知され親しまれるようになり，とりわけ母親は子どもにとってかけがえのない愛着の対象となっており，子どもは母親と触れ合い，母親に身をあずけて安心する。そして直接的な触れ合い経験が重ねられれば，後には声をかけ合ったり目を合わせてにっこりし合ったりするだけで安心できるようにもなる。さらに子どもは母親の存在によって安心するだけでなく，母親とじゃれ合い，むつみ合って喜ぶ。母と子の間で安心できる世界を形成し，その中で表情もゆったりと落ち着き，ケラケラ・ハハハという軽やかな笑いや甘え泣きが表出される。すなわちこの段階では，安心できることと，さらに安心関係にゆとりができてその安心できる場で楽しむ，ということが重要なのである。

5. 志向期（9～10カ月）――母親の近くで熱心に遊び，ときどき母親の慰めを求める。

母親との安心関係によって支えられながら接近－回避を繰り返し，少しずつ警戒心を解きほぐして，身近な人に愛着を拡げ，見知らぬ他人と親しみ，身の回りの事物や新奇な事物に関心を向け，手を出して遊ぶ。まずは母親像や自体像の探索から始まって，母親自体と母親が身に付けている物，母親と母親以外の人といった弁別もしながら，子どもをとりまく世界と楽しく出会い，熱心に遊ぶ。出会いを重ねる中で，人や物はたとえ一時的に見

えなくなっても不断に存在し続けるのだという，対象の常在感を身につけていく。この段階のポイントは，母親以外の人への愛着およびその拡がりと，物への熱心なかかわりおよびその拡がり，の２点である。

6. 得意期（12～13カ月）── 母親と向き合って遊びをやりとりし，ほめられると得意になって同じ動作を繰り返す。

自分の行動が母親からどういう反応を引き出せるかが予測できるようになり，母親と向き合って，おもちゃの受け渡しやボールのころがしっこ，イナイイナイバーやシャンシャンなどの芸当といった活動を楽しくやりとりする。同様に，自分の行動が母親からどう評価されるかが予測できるようになって，自発的にある活動に取り組むようになる。自発的な活動の成果を母親に誇示し，ほめられると得意になったり，逆にわざといたずらをして叱られるのを楽しんだりする。こうした直接的な活動を媒介とした相互作用からさらに，身振りや発声や言語を媒介とした伝達行動が発達する。したがって，行動の結果を予測するようになることと，その目的を達成して得意になることが，この段階での重要なポイントである。

7. 吸収期（15～18カ月）── 身近な人のしぐさやせりふを進んで模倣し，簡単な手伝いをする。

母親の家事，父親の新聞を読むしぐさ，兄姉の勉強，家族の会話など，身近な人たちのしぐさやせりふを自発的に模倣して，行動レパートリーを増やしていく。断片的な動作や発声を単純に模倣するのでなく，１つのまとまりをもった行動として模倣するのである。また，対面して積極的に手本を提示してやらなくても，子どもが自発的におとなの行為を観察して模倣するのである。こうした自発的な模倣学習に加えて，身近な人からの勧誘や指示に従ってその気になり，簡単な手伝いや課題に積極的に取り組む。つまり模倣するかどうかということと，簡単な指示に従えるかということが，この段階のポイントとなる。

8. 自立期（21～24カ月）── 自分ひとりでやりたがる，親からしばらく離れて他児と遊ぶなど，自立的な動きがめだつ。

おとなの意思に対抗して自分の意思を一人前に通してみて，どうにかやりとげては自尊心を満足させ，できないとわかればあっさり助けを求める。自分のできることとできないことを自覚し，できることを少しずつふくらませて自信をつけている。外の世界に対しては，親や保育者からちょっと離れては戻り，安心を取り戻してはまた自立して行くという経験を重ねながら，新しい場面への適応力を身につけている。こうしたことを通じて，即座に満足させたいとはやる気持ちを自制する働きや，欲求の自制に基く知的な回り道行動も出現する。この段階でのポイントは，養育者から離れることすなわち自立と，自分自身のコントロールすなわち自制，の２点である。

9. 友好期（36～42カ月）── 容易に親から離れて，友だちと長時間遊ぶ。

社交性が顕著に発達し，日中長時間親や保育者から離れて，他児と積極的に交渉し合う。気に入った相手と意気投合して一緒に遊んだり，対等な相手と張り合って意地を示していったりする。遊びは，まだまだ並行遊びが主体であるが，他方では追いかけっこやちょっかいの出し合いから始まって，数人でそれぞれの役割を演じながら，強く印象づけられた身近な事象を，想像的かつ創造的に再現するごっこ遊びが活発に展開される。与えられた課題に取り組む，順番を守り当番の仕事をするなど，課題意識も発達する。この段階では，社交性がどれだけ出ているか，また実生活も遊びの場面も含めて役割意識がどれだけ出て

いるかが，重要なポイントとなる。

10. 集団期（72～78カ月）── 構成遊びや競争遊びを集団で楽しむ。

集団意識が発達する一方で，集団の中で自己主張もまた強まる。砂場での砂山づくりや大型積木を使った組み立て遊びなどのような，協業と分業に基く集団的な構成遊びが展開されるようになるとともに，おにごっこやトランプなどのような規則（ルール）に従って互いの優劣を競い合う遊びに熱中する。個人間の競争だけでなく，ドッジボールやリレーなどのような，団体（チーム）対抗の遊びも芽生える。自分で店に行って品物を買う，信号を見て道路を渡るなど，おとなの社会生活にも参加していく。すなわち，競争心の発達と，遊び・実生活両場面での規則理解が，この段階のポイントなのである。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

情緒は,受容系や表出系に対して,知能とともにいわば調整系を構成する１つの独自の系であり,乳幼児の人格発達において主導的な役割を果たしている。したがって発達障害児の早期療育上重要な意義を持っているにもかかわらず,これまで理論的な追求が十分に行われてきたとはいいがたく,情緒発達を促進するための系統的な働きかけに欠けていたように思われる。そこで私たちは,情緒の発達評価の手続きを確立し,発達障害児,とりわけ情緒発達の遅れを顕著に示す児童(いわゆる自閉児)に対する早期療育プログラムを定式化することを研究目的とした。本年度は,情緒の発達段階を明らかにして,個々の段階における重要な発達課題を探ることを中心的な課題とし，合わせて，情緒発達を促進するための療育プログラムを模索することを副次的な課題とした。